

令和4年7月1日

## 京口門だより No. 105

空梅雨とは今年のことでしょう。申しわけ程度に雨が降ったかと思えば、もう猛暑の夏となってしまいました。梅雨前線が日本列島の北に上がると、北日本は雨がおおく、南日本は猛暑となりますし、梅雨前線が南に下がれば寒い夏、冷害の夏となります。気候も世情もおかしくなっているように感じるのは私だけでしょうか。「百姓に泣けとばかりに梅雨旱」(石塚友二)

ところで最近ニュースでも更年期症状に苦しむ女性の話題がよく伝えられています。更年期障害は主として女性において定期的に起こる月経が49歳前後で止まり、それに伴って様々な不定愁訴が起こってくることです。この閉経は月経を起こす卵巣の卵胞ホルモンと黄体ホルモンの分泌が衰えてくることに因る自律神経の失調状態といえます。その症状はホットフラッシュと言われるノボセと発汗症状が有名ですが、よく調べてみると閉経前後の不定愁訴として多いのが、肩こりや腰痛、手足節々の痛みであり、その次が疲れやすさ、腰や手足の冷え、そして神経質になったり、抑うつ気分になったりという症状で、ほかにも頭痛、息切れ、不眠傾向、手足のしびれ、動悸、骨ソシウ症などの症状があるようです。閉経も49歳と決まったものでもなく5~6年前後することもあり、それに伴う不定愁訴も人によってさまざま、何も起こらない人と激しく起こる人があります。

現代の婦人科的にはホルモンの低下が原因だから、ホルモン補充療法で治るとされますが、そう簡単でもなく、多彩な症状に苦しむ方たちがいます。更年期障害は漢方医学の世界でも古くから取り組み治療してきました。漢方では更年期の不定愁訴を人の身体の三要素である気・血・水の乱れとしてとらえ、それぞれの乱れを調える薬を処方します。例えば加味逍遙散という漢方薬がありますが、血の乱れを調える芍薬や当帰や牡丹皮という薬がはいり、気を調える柴胡や薄荷や山梔子が入り、水を調える茯苓や白朮という薬が組み合わされています。それが身体の疲れやすさを治し、イライラしたり気うつを治し、頭痛、肩こりを治し、ノボセや口内炎ができ易いなどにも効果があります。この漢方薬の外にも色々な症状応じた漢方薬がいくつもあります。ホルモン補充という一律な治療でなく、その人その人に対処した治療法を持っているのが漢方医学です。

